



SGS News Letter

第7号

発行日 2012年12月21日

学部長あいさつ「チャレンジ精神を養おう」

SGS News Letter 第7号をお届けします。



学部長 安田 震一
(ヤスタ シンイチ)
William Shang
(ウリアム シヤング)

学園祭「SGS Festa」にてESS主催の英語スピーチコンテストの審査員を務めさせていただきました。そこで、学生たちが普段慣れない、人前に立ち、一生懸命練習した英語でスピーチを披露してくれた。スピーチコンテストの規模は決して大きくはない。しかし、このように何かに向かった努力することの大切さを忘れかけていた私にとっては新鮮な場面であった。来年は参加者を増やし、しのぎを削る機会に上達させ、今後は学外のスピーチコンテストにもチャレンジしてもらいたいと期待している。

とかく「楽に済ませよう」、「手っ取り早くやろう」と考える中で、このように大学のサークルを代表して何か挑戦することは、目標を設定し、それに向かって努力する格好の機会である。自分の学校教育の中で、未だに鮮明に覚えていることがある。それは“you represent the institution”、すなわち学校を代表として弁論大会、吹奏楽コンクールやスポーツの試合に臨むときのことである。組織に恥じないように振る舞うようにとよく指導された。さすがにこの言葉を聞いた時は、体が震えた。この言葉には、振る舞いだけではなく、学業に関してもある程度の成績を修める必要があることまで含まれている。そうした教えはいくつもあるが、最も重要だと思ったのはresponsibility「責任」である。まずは学業に専念して履修した科目の単位を修得し、最低でも全科目で「可」を取らないと、課外活動に参加する資格を失うからだ。その辺は辛うじて参加させてもらっていた。(汗)

スピーチコンテストに参加する場合、長く辛い練習があるだろう。そんな時は文句を言い、何とか逃げようと策略することもあるだろう。そこで言いたいのが、“Don't complain, don't make excuses.”である。とにかく何か挑戦し、失敗したら文句を言わず再度立ち向かうチャレンジ精神が如何に重要か身を持って知ることは、将来社会人になった時に役立つに違いない。

成長過程においては、こうした試練を乗り越える経験が必要だ。とりわけ、グローバル人材になろうとするなら、なお更「内」と「外」の世界、文化によって異なる考え方などを知る必要がある。

スピーチコンテストで賞を取ることは、発想、忍耐そして練習の成果だと言える。しかし、賞を取れなくとも“Losing makes you a better person.”「負けることによってより良い人間になる」という名言もあるように、よく「勝利」よりも「敗北」、「敗戦」を味わうことが大切だと教わった。「負け」を知ること、相手の立場、それも弱い者の立場を理解することが重要であると言われ、弱者の立場を理解することで、後に勝者になった時に敗者をあざ笑うことなくむしろ尊敬し、称える心のゆとりさえ芽生える。

したがって、失敗の屈辱を知ることこれからは勝利への執着、執念を復活させるということ忘れてはいけない。要するに「初心を忘れずに」、「初心に戻る」と解釈でき、勝ち負けの双方を初めて知り、勝つことの意味やその価値を理解するようになる。負けることによって人間的成長が見られる。そのため、勝った時の名言で印象に残っているのは、次のコンテストまでは“stay focused”。因みに集中すること、または小さなミスを最小限に抑えるためという意味を含めて使われることもある。要するにより完璧なスピーチコンテストの挑戦者に成長するためにも“stay focused”が必要である。

グローバル人材になると決めたからには、あらゆる局面を想定したチャレンジを試みていただきたい。SGSではそれらのチャレンジに対応できるようにお手伝いする準備もある。今後、躊躇せずあらゆる意味で自分の力量を試してもらいたい。

今後のスケジュール

- 12月25日(火)~1月5日(土)
冬休み
- 1月28日(月)
秋学期 授業終了
- 1月29日(火)~2月2日(土)
秋学期 期末試験期間
- 2月4日(月)
春季休業期間 開始
- 3月20日(祝)
卒業式
- 3月30日(土)
春季休業期間 終了

発行責任者:
学部長 安田 震一

多摩大学
グローバルスタディーズ学部

〒252-0805
神奈川県藤沢市円行
802番地
Tel:0466-82-4141

平成24年度秋卒業式と秋入学式を挙

平成24年度グローバルスタディーズ学部秋卒業式を9月21日（金）に挙

行、11名の学生が新たにSGSから飛び立ちました。

卒業証書・学位授与を行い松林学部長から一人ずつ証書が渡されました。学生を代表してダレン リース マラドさんが答辞を行い、SGSで一



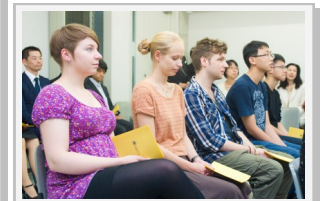
生付き合いのできる仲間に恵まれた思い出を伝えました。後援会副会長で、学生委員長でもあるマーク ザイオン教員より、後援会記念品が代表者へ手渡され、最後に式典出席者全員による学園歌斉唱で無事幕を閉じました。

授与終了後は写真撮影や軽食をとりながら教職員と時間の許す限り、歓談の一時を過ごしました。



また、同日秋入学式を挙行いたしました。式典には、3名の新入生と5名の交換留学生（オーストラリア1名・ドイツ2名・シンガポール2名）が参加、多少緊張した面持ちでしたが、自己紹介が終わると安堵の表情になったのが印象的でした。出席した教職員も自己紹介を行い歓迎の意を伝えました。

学生達にはコミュニケーション力を発揮し、1日でも早く多くの仲間が増えることを期待します。



SGS Festa

学園祭「SGS Festa」を開催

11月3日（土）・4日（日）に学園祭「SGS Festa」を開催いたしました。歴史の浅い学園祭と言いながら、第6回を迎えました。

昨年度は、2年生を中心に企画運営を行い、未熟さを露呈した感があり、その悔しさを活かしたいと、今年度は主力部隊として3年生が、後輩を指導する形で企画を行いました。しかし、残念ながら集客動員数は前年度よりマイナス、後援会役員並びに学生委員会では厳しい意見が多く出される結果となりました。



今年は、寺島実郎学長講演が行われ、300名教室が満席、多くの立ち見が出ました。1・2年生の多くの学生が出席、また地域の方々の関心の高さを感じさせられました。実行委員会から「3.11」の震災に関する内容を依頼し、講演テーマを、「3.11の衝撃、そして世界の構造変化」としました。テーマに関連し、講演後の時間帯には、宮城県気仙沼市の地元復興ボランティアグループを招いて、本学東北ボランティアサークル「Make it!」の学生とのパネルディスカッションを行い、たいへん内容ある意見交換が行われました。

また、6年目の開催にして、初の芸人による“LIVE”を試みました。キングオブコント2009優勝の「東京03」、漫才新人大賞2009優勝の「ハマカーン」ほか、そうそうたるメンバーでしたので、集客もまずまずでした。

その他近隣の中学校の吹奏楽部コンサートが2年連続で行われ、地元にも根付いていることを痛感しました。

一方で、学生参加のステージイベントは、集客が少なく、お客様に観て楽しんでもらうという視点、企画力や宣伝力等課題を残しました。AEPのクラス単位での出店も昨年より工夫はされているものの、連帯感が乏しいものでした。各教室の展示では、ボランティアサークルや文化サークル・学生会の部屋など、内容は充実していましたが、これらも来場者が少ないのが現状でした。



来年度に向けてすでに学生委員会では、今年度の結果を踏まえて意見交換を行いました。改善策の第一歩として、学園祭実行委員会が単体開催ではなく、今年活動内容が充実した学生会と全面協力し、互いの企画に意見交換並びにイベント協力をするよう指導し、両団体の交流をスタートさせています。

国際交流 シンガポール留学生受入れ&春期留学

10月1日から11日間、提携大学である、シンガポール ナンヤンポリテクニク(NYP)から14名の留学生(共学ですが参加者は全員女性でした)を受入れました。

彼らは日本語の知識がほとんどなかったため、ホームステイではなく、ホテルに滞在しましたが、歓迎会の手巻き寿司&たこ焼パーティーから始まり、書道、着物体験、お茶会、鎌倉・箱根日帰り観光、SGSの学生との渋谷・原宿・新宿ショッピングツアーと日本を満喫したようです。

また、今回のツアーの目的は、「日本のホスピタリティとビジネスを学ぶ」ことでしたので、都内の会員制ホテル見学や、地元のいすゞ自動車工場もスケジュールに組み込まれました。滞在中、一緒に授業を受けたり、ショッピングに行くことにより、SGSの学生とシンガポールの学生間の交流が深まり、送別会では、あちこちで写真を撮りあう姿が見られました。

彼女達の印象は、「自立して物怖じしない」でしたが、プログラム後のアンケートには「自立することを覚えた」「不安だったが、海外に出てみて自信がついた」といった声が多く寄せられ、これは日本の学生にも当てはまるのではないかと感じました。

春休みには、モナシュ大学(オーストラリア)、CPIT(ニュージーランド)、ビクトリア大学(カナダ)、UCLA(米国)、ハワイ大学、NYP(シンガポール)に計22名が短期留学へ、プレーメン州立経済工科大学(ドイツ)、RMIT(オーストラリア)、NYP(シンガポール)に5名が長期交換留学へ出発します。



第7回「World Cafe」

SGSの学生や教職員がSGSについて議論を交わす「World Cafe」(学生会主催)が10月15日(月)に行われました。「カフェ」のような寛いだ空間の中で、参加者である学生・教職員がルールに沿って自由に意見交換を行い、互いに理解を深め、創造的なアイデアや知識を生み出して行きました。今回のテーマは、①どのような授業を受けたいか、②どのようなイベントを求めているかです。参加学生は、学生生活の充実を図る上で、自分の意見を発信することの重要性や楽しさを感じていますが、大学生活そのものに関心が希薄な学生が多いのが現状であり、このような絶好のイベントにどう取り組ませるか、教職員としての課題でもあります。

今回は、今年度新たに誕生した料理サークルが軽食を提供し、調理終了後に参加するなど、各イベントにサークル等がコラボレーションをし、学生間でも参加増への工夫を行っています。

「World Cafe」は年間2回、開催しています。



第3回市民講座を開催

グローバルスタディーズ学部では、9月1日・8日・15日の3回の土曜日に、市民講座「グローバル社会を考える」を開催しました。これは、大学祭やオープンキャンパスの際には必ずしも十分に触れることのできないSGSにおける教育・研究を住民の方々に披露し、SGSが目指すグローバルな人材の育成、そしてSGSへの理解を深めてもらうとするものです。一昨年に第1回を開催し、今年で3回目を数えるに至りました。特に藤沢市教育委員会からは、市民に対する生涯学習の意義を踏まえて、毎回資金面でも支援を頂いています。

第1週 9月1日 杉浦悦子教授「文学の中に流れる時間」

時間は過去から未来に流れるものです。20世紀の文学では停止したり、逆流する時間が表現されるようになりました。「エミリーに捧ぐ薔薇」(ウィリアム・フォークナー)等を中心に文学の中に流れる不思議な時間の在り方について講演。(参加人数39人)

第2週 9月8日 石塚智子専任講師「言語と社会」

日本は、日本語ができれば特に支障なく暮らせる国ですが、国際化が叫ばれ、ますます多文化社会になると考えられる日本の未来について、世界の言語状況を見つつ、また、多文化共存社会における一番大切なことをテーマに講演。(参加人数40人)

第3週 9月15日 アイグル・クルナザロバ教授「世界の政治と日本」

国連で安全な世界を保障するために採択されたリサーチとプロテクトについて、また国際安全保障・経済・国際政治の場での駆引きにおける国同士の勢力の均衡、人間の安全保障、統治権等について、日本の役割と立場に焦点を当てつつ講演。(参加人数45人)

いずれの回も40人程度の参加者を得て盛会に行われました。3回の講座全て又はその2回に参加された方41人には、学部長名で修了証書を授与いたしました。

今年の講座で特筆すべきは第3週です。クルナザロバ教授の講演は英語で行われましたが、それを本年3月の卒業生玉城メリッサさん(新年よりロイヤルメルボルン工科大学大学院生)が日本語に逐次通訳しました。英語でのコミュニケーションを主旨とするSGSらしい試みでしたが、こうした形式で行ったことについては受講生からも好評を頂いており、市民講座を多様なテーマで実施する上でも大きな成果となりました。

講師を務めて下さった3人の先生方、受講生の方々、そして支援頂いている藤沢市教育委員会にお礼申し上げます。報告といたします。

(地域活性化センター運営委員会SGS小委員会)



キャリア 2012内定状況・インターンシップ先一覽

本学部4年生(2013年3月卒)の12月1日現在の内定率は約60%です。今年度は就職活動開始時期が遅くなったことにより、中堅企業を中心に10月からの求人が豊富です。本学部では未内定学生の個別指導を強化し、学生も着実に就職活動を続けていますので、年度末までには、ほとんどの学生が適職を探すことができると考えられます。

(主な内定先は別表1参照)

3年生も、12月になり就職活動を開始しました。現在は、エントリーや合同企業説明会に参加し、業界、企業研究をおこなっています。年が明けると、エントリーシートに提出や筆記試験、面接など就職活動が本格化します。

また、本学のキャリア支援の特徴の一つである2年生の国内インターンシップ、春のインターンシップ履修生は34名、夏のインターンシップには57名が参加済みで、合計91名の学生が参加予定です。2月から3月にかけて別表2のような22の企業、団体でインターンシップ実習をおこないます。3月24日(日)のインターンシップ報告会で各自のインターンシップ実習をまとめ、発表し、この春の体験を自分の力にすることができます。

別表1

12月7日現在(重複内定含む)

主な内定先	
旅行・観光・イベント	エイチアイエス、富士屋ホテル、国際ホテル、四季リゾート、共立メンテナンス
商社	大塚商会、日立ハイテクマテリアルズ、ウィックスコミュニケーション、ベンダーサービス
運輸・物流	東港丸楽海運、神奈中バス、ANAケータリングサービス、国際自動車
食品	岩塚製菓、東海澱粉、鈴廣蒲鉾本店
外食・フードサービス	フォーシーズ、銀座久兵衛、テンスターズダイニング、ドリームダブルコミュニケーション、日本マクドナルドファールディング、ニュートン、日本食研、トリコロール、ワタミ
小売・流通	横浜日野自動車、ケーユーホールディングス、セリア、トータス、オーケー、カメガヤ、コーナン商事、バルタック、エスアイ堂、九九プラス、生活協同組合コープネット事業連合
アパレル・衣料	ワールドストアパートナーズ、AOKI、リアライズワークス、ユニクロ
金融	富国生命保険、第一商品
機械、プラント	寺岡精工、日本ビソー、日本テクノロジーソリューション、シグナス
その他製造	ザ・バック、メイワックス
情報・通信・メディア	ソニーミュージックエンターテインメント、NTT番号情報、ビーコンインフォメーションテクノロジー、デザイン、ジェノバ、ジュアアイビー、ティエガイヤ
サービス・コンサルタン	バイオテック、リビエラ東京、MIDDLE MAN、KERN COUNTRY CARE FACILITY、テンブスタップ、サニーテーブル、進和学園、キャリア、ヘルセ、オリエンタル工業、リラク、神奈川配せん人材紹介会社
教育	ECC、日本教育クリエイト、イツツイジャパン、東名自動車学校
住宅関連	積水ハウス、ケイアイスター不動産、ユミネット、オンテックス
医療	やよい堂整骨院
リース	アシパックス

別表2

No	インターンシップ先
1	(株) アルファ映像
2	(株) アンビションアクト
3	(株) 伊藤商店(隠れ里「車屋」)
4	特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン
5	(有) 江ノ電沿線新聞社
6	オセアニア交流センター(株)
7	(株) オデッセイコミュニケーションズ
8	湘南ホテルマネジメント(株)(グランドホテル湘南)
9	スカイビルサービス(株)
10	相鉄ホテル(株)(横浜ベイシエラ ホテル&タワーズ)
11	大安興業(株)(江の島ボウリングセンター)
12	特定非営利活動法人地球市民ACTかながわ/TPAK
15	医療法人 柏提会(財団)(戸塚共立第一病院)
14	公益社団法人 日本フィランソピー協会
13	公益財団法人 日本ユニセフ協会
16	ヒルトン東京ベイ
17	(株) 丸山工務所
18	横浜グランドインターコンチネンタルホテル
19	(株) よし! ツアー
20	(株) ライセンスアカデミー
21	特定非営利活動法人 留学協会
22	(株) ワイズプラス(エアネット事業部)

教員紹介

橋詰 博樹 先生 Hiroki Hashizume

SGSで教え始めて4年目になります。環境省、厚生省、世界保健機関、廃棄物研究財団、アジア太平洋地球変動研究ネットワーク等での経験を踏まえて、環境保全や国際協力を研究・教育テーマとしています。環境論、21世紀の科学技術: グリーンエンジニアリング、地球資源、地球環境と日本、国際貢献の5科目を担当しています。

ここ数年、環境問題と対策の基本的考え方に大きな変化が生じています。学生時代から40年、環境を専門分野としてきましたが、放射能汚染は一貫して環境問題の外的問題でした。それが東日本大震災による原発事故以降、環境問題として急速に位置付けられつつあります。放射能で汚染された廃棄物の処理や土壌等の除染は手探り状態にあり、政策的に確立されたものはありません。地球温暖化への注目も1992年リオデジャネイロ地球サミット以降の20年であり、その対策は先進国・途上国間の厳しい対立が続いてなかなか進みません。大学はニュース解説の場ではありませんが、変化の背景にある根本的な考え方・潮流を理解し/理解しようとし、自分なりの提案を試みるのが、グローバルな社会で生きていく学生にとって極めて大切と考えています。

授業は、廃棄物処理/リサイクル施設・省エネ施設の見学の他、産廃業者、国際協力に関わるNGO・民間会社、在日途上国大使館、温暖化対策の国際交渉官等、多彩なゲストを招き、現場感覚も加えつつ、実施しています。

学生、特に専門科目の履修学生はよく頑張っていると思います。また、今学期、二つある環境論のクラスの履修登録者は24人と67人です。24人も多目ですが、67人は私には大幅な新記録。多くの学生が関心を持ってくれるのはうれしいのですが、学生の興味が毎年さほど変わらないとすると、著しい増員は他の理由かもしれません。期末試験の過去問が出回り「組みやすし」と見られているような感触もあります。我が身を顧みて過去問学習を否定しませんが、それだけでは本末転倒。ここだけの話ですが、今学期末の試験は、もう一ひねり加えることとしましょうか。

